モーツァルトの死の3か月前に初演された彼の最晩年の傑作。おとぎ話のようなストーリーだが、秘密結社フリーメーソン（ヨーロッパ中に広まった「徳性による人間の完成」を目指す神秘主義的な団体）の思想が色濃く反映されている。ドイツ語によるジングシュピール（歌芝居）である。

パパゲーノはパートナーとなるパパゲーナと出会う（第2幕）

モーツァルト

魔笛

2幕

Die Zauberflöte *Wolfgang Amadeus Mozart*

王子タミーノは、夜の女王の娘パミーナを高僧ザラストロから救い出そうとする。高僧はそんな王子を評価し、タミーノとパミーナは試練を乗りこえて結ばれる。

【主な登場人物】
夜の女王Ⓢ
パミーナⓈ＝夜の女王の娘
パパゲーナⓈ＝若い娘
タミーノⓉ＝王子
パパゲーノⒷr＝鳥刺し
ザラストロⒷ＝高僧

第1幕

王子タミーノは大蛇に追われて逃げてくるが、気絶してしまう。そこに夜の女王に仕える三人の侍女が現れ、大蛇を退治する。侍女たちは、意識の回復した王子に、夜の女王の娘パミーナをザラストロから救い出すように言い、彼女の肖像画を渡す。さらに王子には魔法の笛を、お供の鳥刺しパパゲーノには魔法の鈴を渡す。そして、二人は旅立つ。

王子は神殿の前にやって来る。扉の前で弁者に質問を受けたあと、王子が笛を吹くと、それを聞いたパパゲーノがパミーナを連れて駆けつけようとする。しかし見張りのモノスタトスと奴隷たちが現れ、彼らの前に立ちはだかる。ところがパパゲーノが鈴を鳴らすと彼らは浮かれ出す。そこにザラストロが到着。ザラストロとパミーナの前に王子が連れられてくる。

タミーノとパミーナは初めて対面し、お互い夢に見ていた恋人であることに気づく。ザラストロは二人に試練を命じ、二人を引き離す。

第2幕

王子に課せられた最初の試練は沈黙だ。パミーナのもとに夜の女王が現れ、アリア**《復讐の心は地獄のように》**を歌って、娘に復讐を言い渡す。しかし、ザラストロはパミーナに復讐よりも愛を説く。その後、王子が笛を吹く。それを聞いてパミーナがやって来るが、王子は一言も話さない。悲しむパミーナ。

王子は第一の試練に合格し、次に水と火の試練に立ち向かう。パミーナが一緒に試練を受けることを許され、二人は水火の試練に臨む。王子が笛を吹き、二人は試練に打ち勝つ。そして、パパゲーノはパパゲーナを得て、王子とパミーナはザラストロに祝福されて結ばれる。Y

闇の世界を支配する夜の女王

大人も子供も楽しめる人気のジングシュピール

タミーノはパミーナとともに試練を乗り越え、祝福される（第2幕）

見どころ 聴きどころ

タミーノの《なんという美しい絵姿》（第1幕）や、パミーナの《愛の喜びは露と消え》（第2幕）も素晴らしいが、夜の女王のコロラトゥーラの技巧を駆使した2つのアリア《わが運命は苦しみに満ち》《復讐の心は地獄のように》、パパゲーノのユーモラスな《おれは鳥刺し》、パパゲーノとパパゲーナの楽しい二重唱《パ、パ、パ》など、脇役の音楽がより印象的だ。

DATA **作曲**／1791年 **初演**／1791年9月30日、ウィーン、アウフ・デア・ヴィーデン劇場 **原作**／クリストフ・マルティン・ヴィーラントの童話集「ジニスタン」のなかの「ルル、または魔笛」 **台本**／ヨハン・エマヌエル・シカネーダー **上演時間**／約2時間30分 ［写真：新国立劇場］

オペラ事始め

その始まりと今日まで

現存最古のオペラは1600年 結婚式の席で上演

オペラとは、イタリア語で「作品」という意味。クラシック音楽では「作品番号」と訳されるラテン語「オプス」（op.）の複数形が語源で、文字通り「諸芸術の融合」だ。音楽、演劇、舞踊、文学、服飾、ヴィジュアルアート等々、あらゆる芸術を網羅し、短い時間に蕩尽（とうじん）するのだから、これほど贅沢なものはないだろう。

「オペラ」とされる舞台芸術作品が生まれたのは、16世紀末のイタリアだった。時はルネサンス末期。神や教会の支配から、人間の素直な魂や美への共感、さらには肉体そのものをも復興させようとする精神運動が、地中海貿易で勃興する貴族の経済力を背景に展開された。ルネサンスを担った知識人たちは、彼方昔に眠る古代ギリシャ時代こそが、復興すべき理想郷と信じた。ガリレオ・ガリレイの父も参加したフィレンツェのカメラータなるディレッタント芸術集団は、歌手の演技に合唱がコメントをつけ、古代の神話伝説、英雄物語などが語られるギリシャ悲劇を復活させようと試みる。

1600年10月、フィレンツェで行われたマリア・デ・メディチとアンリ4世の結婚式で上演されたヤコボ・ペリー作曲の『エウリディーチェ』が、今日まで曲の全体像を伝える最古のオペラ作品とされる。

誕生したばかりのオペラは大評判。プロの音楽家も手掛けだす。1607年にはマントヴァ宮廷でモンテヴェルディが斬新で効果的なオペラのお手本『オルフェオ』を発表。オペラは瞬く間にイタリア各地の宮殿に流行した。

1637年にはヴェネツィアに入場料を取って客席を一般市民にも開放する「劇場」（サン・カッシアーノ劇場）が誕生、イタリアのバブル経済を背景に、17世紀末までに400を超える作品が上演された。題材も、現実味の薄いギリシャ神話世界から、『ポッペアの戴冠』のような現代のテレビドラマにも似た複雑な人間的愛憎のドラマにまで広がる。

こうしてイタリアで生まれたオペラは、1世紀も経たない間にヨーロッパの宮廷や都市の中心的娯楽となっていく。18世紀にロンドンで大活躍したドイツ人ヘンデルも、売れっ子になったのはイタリア・オペラの作曲家としてだった。

この時代のイタリアのオペラが現代の私たちに馴染みが薄いのは、あまりに総合的な芸術だったので、すべての要素を再現するのが不可能であったためだ。多くの作品が主人公として去勢した男性歌手カストラートを要求しているのも難点で、復活への大きな障害となっていたが、そんな困難を乗り超え、昨今のヨーロッパのオリジナル楽器大流行のなかで、猛烈な勢いで復興してきている。 W